

ます。旧制中学校時代は軍人となるのが夢でありましたが、残念ながら陸士の試験に落ち一時は希望を失した時もありました。

地獄の収容所三〇四

愛知県 今井 昭 治

間島（延吉）で編成された第三〇大隊は混成の寄せ集め大隊で大隊長が誰でもこの部隊の将校であつたかも知らない大隊であつたが、炊事班は関東軍経理部東寧派出所の経理課の加倉井軍曹が班長で、炊事班員は関東軍経理部東寧派出所の警備のために大肚子川第五七三一部隊から派遣された兵隊であり、大隊の主体は第三軍関係ではなかつたかと思われる。

昭和二十（一九四五）年十月三十一日ごろコムソモリスクから約百二十キロメートル奥のエバラ湖の近くのドイツ軍捕虜が収容されていた収容所に収容された。

三〇大隊（後に三〇三収容所となる）の作業は伐採と木挽き作業であつた。木挽作業は日本では「木挽き一升飯」といわれていたほどの重労働で

あったが、三〇三收容所のソ連軍の收容所長は年配の海軍少佐で人柄の良い将校で、木挽作業が重労働であることを知っており、ノルマー〇〇パーセントの給食としてくれ、食事には文句を言うことはなかった。

昭和二十一年一月に身体検査があり木挽で給食が良かったので一級となり三〇四收容所に移動した。シベリアに抑留されて間がなく他の收容所の状況など分かる状態ではなかったが、三〇四收容所については地獄の様な收容所で食糧事情が最悪で作業ノルマも厳しく、收容者が三、四百人ぐらい死亡したうえ、日本人の隊長が下士官に丸太棒で叩き殺された收容所であるとの噂が伝わっており、最悪の收容所に移動するのだと移動前から不安感がいっぱいであった。

昭和二十一年一月ごろ三〇三收容所から何人の移動があったか忘れたが、三〇四收容所に着いて收容所の規模が五百人ぐらいの收容所であるが現に約百人が收容されており、炊事場の設備が小

さくて食事は毎食事ごと二回に分けて炊事をしており朝食は第一次が午前三時ごろ、二次が午前六時ごろとなっておりと説明されて收容所の生活の大変さが心配されたが、生活をしてみて異常な事ばかりであった。

三〇四收容所に着いたときは午後で暗くなっており、收容所の建物等すべての施設については分からず暗闇の中に連れ込まれたという感じで、宿舍の建物が收容所内のどの位置にあり他の施設がどの様になっておるかも分からなかった。宿舍は丸木造りの建物で、電気・ランプ等はなく真っ暗で、ベッド（寝る場所）は二段式で室内の中央にストープが一台あった。想像していたとおりの地獄の中に放り込まれて、これから先はどうなることか分からず生きる希望は全くなかった。

三〇四收容所の作業は伐採が主な作業であった。食事は隔日おきに朝食が午前三時ごろ、給食は飯盒の掛け蓋に一杯ぐらいの塩汁で、中味は大豆か小豆の皮が数個浮いているもので食事といえる様

なものではなかった。この塩汁の飯あげが命かけの作業であった。飯あげの食缶は日本軍時代の梅干か漬物が入っていた木製の小樽で持ち手が付いておらず持つときは抱きかかえるようにして炊事場から宿舍まで真っ暗の中を運ぶのであった。塩汁の入った小樽をかかえるように持つてよたよたと運んでいると突然暗闇の中から飯盒を持った収容者が飛び出してきて、かかえておる小樽の中に飯盒を入れて塩汁を盗んで逃げて行くのである。樽を抱えており追うこともできず盗まれたつばなしである。このころ小樽の食缶をかかえて運搬中に食缶の中に飯盒を突っ込んで塩汁を盗まれたので抱えていた食缶を下ろして泥棒を追いかけて行つたが逃げられてしまい、食缶を置いたところに戻つてみると食缶ごと盗まれており、盗まれた班の収容者は食べるものを盗まれて何一つ食べるものがなくなってしまうという事案が発生したので、かかえておる食缶に飯盒を突っ込まれて塩汁を盗まれても食缶は絶対に手を放さないということに

なつておつた。

午前七時ごろ作業開始の点呼のため収容者全員が広場に集められて員数を数えられるのであるが、数を数えることの出来ないソ連兵がいるので点呼の時間が毎朝一時間以上かかり、零下三〇度ぐらいの気温の中で疲れきつた体で一時間以上も立たされておかれるのでその場で倒れて死亡する者も出た。点呼に出て来れない者はどの班の者であるか分からない状態であり、点呼に出て来れない人は死亡したと思つていた。

点呼が終るとそれぞれ定められた伐採現場に行き、毎日違った相手と鋸一丁と斧（タポール）を渡されて作業にかかるが二人引きの鋸で気持が通じないと作業の能率が上らない。零下三〇度以上の気温の中の樹木は凍つており、切り始めの時はコンクリートの柱に鋸を当てる様なもので中々切り始めることができない。

零下何十度という気温の場所には生きものが食べられるものなど何一つ有るものではない。口に

入り食べられるものがあれば何でも食べた。伐採する松や樅の木の松やにである。切り倒した松や樅の木の松やにを探して、松やにを樹木の皮の上に乗せて焚火の上にかざして溶けてきた時に雪中に落として、固まったものを口に入れてガムのように噛むのである。この松やにを食べてしまうと便秘をおこしてこれが原因で死亡する者も出た。

松やにの他には切り倒した樹木の幹に一番近いところの薄皮をはぎとり斧で細かくつぶして塩汁の中に入れて食べるのであるが、生の時は柔らかく見えるが汁の中に入れて煮ると固くなり木片を食べるようなものであるが、満腹感が満たされれば良いのである。これを食べると糞が大鋸屑のかたまりの様なものになる。こうした状況下で働かされてもノルマが上らず夕食時に配給される黒パンが少なくなってきた。

伐採作業が終つてからノルマ以外のソ連人の暖房用の薪を切られ宿舎に帰り着くのは午後七時か八時ごろであった。宿舎に着くとその日の黒

パンの分配である。一個分隊分隊長以下十一人であったがパンの分配は分隊長がやっていたが、分隊長の分配が不公平であることから黒パンの分配は隊員が順番にやることにして、黒パンを分配するときは分配する者を除き十人の二十の目が分配される黒パンに注がれて、蚤の糞ほどの切屑でも見逃さず分配し、分配した黒パンの受け取りは阿弥陀くじで決めて受け取った。受け取った宝物のような黒パンを手持って寝台のある所まで行き、二階の寝る所上がるために持ってきた黒パンを二階の寝台のところに置いて両手で二階に上ろうとした時に黒パンから手を離れた一、二秒の隙間にこの黒パンを盗もうとする手が伸びてきたので盗まれないようにと黒パンを手で覆うと黒パンが砕けて飛び散り形がなくなり飛び散った屑を周辺に居た者が拾って口に放り込んでおり、宝物の黒パンを自分の口に入れることができないことがあった。空き缶で造った食器に入れた塩汁を雪で増してストーブの上で温めて飲むうと思つてストー

ブの上に置いた時も食器から手を離すと盗まれてしまうのである。あるとき、塩汁を温めようとストーブの上に食器を乗せたときに声を掛けてきた者があつたのでその方を振り向いてすぐ食器の方に目を戻すと暗闇の中から手が伸びて食器を盗もうとしておるのである。油断もすきもない、地獄の様な生活であつた。

この地獄の様な三〇四收容所で生き延びたのは神仏のご加護があつたなればこそと思う。

食べ物は何一つ無い中で今日死ぬのか、明日死ぬのかと、その日その日の命を思う日が続いた。

こうした地獄の様な生活をしているときに、馬糞で材木を運び出しておる日本兵が馬方のソ連人の親方（カマンジル）から防寒帽子の中に何か入れてもらい、見ておると馬を引いて焚火の所まで行って馬を木につなぎ自分は腰にぶら下げておる空き缶で造った食器の中に馬方の親方からもらった物を入れて火にかけた。するとなんとも言えぬうまい匂いがしてきたので思わず立ちあがつて馬

方の兵隊の居るところまで行ってみると、馬に食べさせる馬料の燕麦を馬に食べさせず空き缶でいって自分が食べておつたので、思わず手を差し出すと馬方が何も言わず手のひらに一つまみの燕麦を分けてくれた。お礼を言う暇もなく口の中に放り込んで食べた。そのうまさは生れて初めて味わううまさであり、六十数年たった今でも忘れることができない味であつた。

馬方から一つまみの馬の餌の燕麦をもらつて食べたとき、地獄の三〇四收容所で生き残れるのは馬方になり馬の餌を馬に食べさせず自分で食べれば馬には悪いが生きることができるとも思えないと思ひ、その日の帰りから馬方の親方の居る場所を確認しておいてその夜から親方の部屋に行き片言のロシア語とジェスチャーで「私は農家出身で馬が好きで馬の取扱いに馴れておるからノルマをあげるから馬方としてくれ」と頼んだが、見知らぬ日本兵が飛び込んできて何を言つておるか分からぬので受け付けてくれず帰つた。この日から毎

日親方の室に行き、馬方志望を訴えたところ馬方にしてやると言ってくれた。六回目の日であった。

三〇四収容所で勝手に仕事を変えることができたのは今でも不思議に思っておるが、神仏のお陰だと思ふ。翌朝に親方の所に行くと親方が馬屋に連れて行ってくれた。馬屋の様子を見ておると日本兵の馬方はそれぞれの馬を引き出して馬装を整えて櫓をつけて出発して行くが馬装をしたことがないのでどうするのか分からないのでボーとしておると、親方が一頭の馬を引き出して馬装の仕方を教えてくれた。櫓をつけてくれたので日本兵の馬方の後について現場に行くと、櫓に木を積むのは日本兵が手伝って積んでくれるのでだんだん馬方に馴れてきて仕事が面白くなってきた。馬を見ておると馬にもそれぞれ癖があり、おとなしくて力の有る馬、蹴る馬、噛み付く馬、発情した馬がいることが分かったが、ソ連は日本兵に定まった馬を与えることをせず、その日その日に早く来た者から勝手に馬を渡していた。これがソ連流の人

の働かせ方法だと思つた。

零下三〇度になるような気温の中で馬装をするとき防寒手袋を脱いで素手で馬装する時は大変であつたが親方が手伝ってくれたので仕事は早く馴れた。楽しみは昼ごろ馬の餌をもらうときであつた。親方の前に行くと親方は本日は何回運んだと尋ねるので三回運んだと言うと「ハラシヨウラボータ」と言つて馬の餌を多めにくれたように思つた。馬の様子について尋ねられるがロシア語が分からぬので「ダーダー」と返事をしておくと親方は満足そうな顔をして帽子の中に馬の餌を入れてくれた。馬を引いて焚火のところに行き、馬を木につなぎ馬には餌をやらずに空き缶に燕麦を入れていり始めて馬の方を見ると馬が「俺の食べ物くれず横取りして食べておる日本兵は悪い奴だ、俺も日本軍の軍馬で戦友である」と言つておるように思われたので、夕食の時食べようと残しておいた分を馬にさし出すと馬は一ナメになめて食べてしまった。日本軍のために満州に連れて来られ

戦争に負けてソ連のシベリアに連れ込まれて戦友の日本兵に餌をピンはねされて、こんなバカなことではないと馬は思ったに違いないが、腹が減って死んでしまつては日本に帰れないから許してくれと頭を下げた。

馬の餌を横取りして食べることができるので伐採作業の時に比べて仕事が楽で、親方との交流もできて地獄の三〇四收容所の生活も少しは楽しめるようになってきた。

山から馬櫓で引き出した材木の集積所にソ連軍の三十代の技術少佐が毎日来ていたが、何の縁も分らないが目にかけてくれ話しかけてくれて、その都度スピルトという防寒手袋をしていても吸うことのできるフィルターの長いタバコやロシア飴をくれ、地獄で仏様に会つたような気がした。

昭和二十一年四月上旬に地獄の收容所三〇四で身体検査があり、三〇三收容所から一級の体で来たのに三級になっておつた。

馬の餌を横取りして食べておつたため死ぬこと

なく地獄の收容所三〇四で生き抜くことができた。三級になり三〇八收容所へ移動することになり約五十人が移動した。移動した三〇八收容所は地獄收容所三〇四と違って明るい感じの良い收容所で、地獄から極楽に来たような気がした。

三〇八收容所の所長は三十代の上級大尉で共産黨員であつた。地獄の收容所三〇四から三〇八收容所に移動した日、所長が移動人員の確認を兼ねて移動者の状況を見に来た。このとき地獄の收容所三〇四で大事にしてくれたエンジニアの少佐が所長と一緒に来ており、私の顔を見て笑顔で「イジスタ（ここへ来い）」と声をかけてくれたので少佐のそばに行くと、少佐は三〇八收容所長に何か話をしていたが内容は分からなかつた。少佐が帰るとき「ドスビダーニヤ・ハラシヨ」と言つてくれて帰つて行つた。これがエンジニア少佐との最後の別れとなつた。この技術少佐に会つてからその後の抑留生活が変り抑留者としては別天地のよくな生活ができた。三〇八收容所に移動した日の

夜のことであった。夕食を済まして宿舎にいと日本人の通訳が来て「今井がいたら出て来い」と言うので出て行くと「所長が呼んでおるから付いて来い」と言つて所長室に連れて行かれた。所長室に入ると所長が通訳を通じて「明日から所長の当番兵として所長の身辺の仕事をせよ」と言うので驚き、どうして当番兵として働くのかと尋ねると「エンジニアの少佐が三〇四収容所でハラショウラポータ（良く働く者）であつたと褒めていたから当番兵として働いてもらう。衛兵所には出入りについて話をしておく」と言つてくれた。

翌日から衛兵所の出入は自由にできて所長宿舎の掃除、洗濯、ペーチカ焚き、所長の食事をつくるという抑留者にとつては夢のような極楽な仕事であり、所長は独身で時間のあるときは魚釣り、茸採り等に連れて行つてくれた。

地獄の収容所三〇四で生死を分けるような生活の中から生きるためやつたことのない馬方の仕事の中に飛び込んで行つたために馬方の親方、技術

少佐に出会うことができ、地獄から極楽世界に入ることができた。

昭和二十三年十一月一日の夜、中央アジアから復員して来た抑留者に高砂丸の船中から海に放り込まれそうになつたが救ってくれる人がおり、助かり、翌十一月二日に無事舞鶴港に上陸できた。

昭和二十年八月九日のソ連軍侵攻から舞鶴入港まで地獄・極楽の抑留生活であつた。

【執筆者の紹介】

現住所 名古屋市瑞穂区下坂町

生年月日 昭和元年十二月二十八日名古屋市
れ

昭和十九年三月名古屋電気学校を卒業

同年四月関東軍経理部工務課に技術雇員（軍曹担当官）として就職

同年五月二十七日に関東軍経理部東寧派出所に
終戦まで勤務

シベリア抑留の後、昭和二十三年十一月二日に

舞鶴港に復員。

昭和二十六年国家地方警察巡查を拝命、昭和五十年八月退職、株式会社アイシーアールを設立今日に至

財団法人全国強制抑留者協会愛知県支部発足以来の会員で、長年理事兼書記として支部発展に寄与

更に一昨年来「愛知県シベリア抑留者祈念碑建立之会」の会計として、平成十八年五月末に立派に完成

(愛知県 河村 広康)

シベリア抑留記

滋賀県 小松 藤次郎

海空共に、敵の制圏域に入った日本列車の最北端占守島の昭和二十(一九四五)年八月は、毎日三、四回、アメリカ空軍の重爆機による高空よりの爆撃と、八月九日突如宣戦布告したソ連軍の戦闘機による機銃掃射にさらされていた。

片岡湾と海軍飛行場がよく見える郡司ヶ丘の我が隊は、三ヶ月前の五月に内地へ転進した第六高射砲隊の残留、僅か九人の照空隊である。

八月十五日昼過ぎ、第五十一警備隊本部から帰隊された助乗中尉から、突然終戦が伝達され、無条件降伏を知り、一挙に奈落の底に突き落とされた思いで、張り詰めていた戦意はもろくも崩れ、ただ茫然とする中、明けて十六日には、近くのカムチャツカから、ソ連軍の地上部隊が、占守北端の国端崎に來襲、彼我は終戦を知りながら戦闘状